

# 田中親美透写古筆切「名葉集」の研究（2）

小島孝之

## はじめに―お詫びと訂正―

前稿に引き続き、田中親美翁の透写によって残された古筆切『名葉集』の内容の紹介を続けたい。

が、その前に前稿の誤りを訂正し、さらに前稿で不正確な解説を行った箇所を修正を行いたい。

先ず訂正を要する箇所は、田中重氏の年齢を米寿と記してしまつたことで、正しくは卒寿である。最近私は年齢を誤る間違いが多く、自分の年齢さえ間違えることがよくある体たらくである。重様には深く深くお詫び申し上げる。

次に断簡の解説の誤りを修正しなければならない。

16の「後鳥羽院宸記切」について、これは依然として解説

に難渋しており、正解には程遠いのであるが、多少は前進したかと思う。現時点では次のように読んでみた。

今日儀、毎事無違失。天禎快晴。毎事相

応、尤所悦思也。公卿将並殿上人多以曳

丸緒。右大将猶曳丸緒云々。前に浩垂云々。此條

不審。有露丸緒浩垂之無露時不然。内

所聞直也。何是非云々。尋事也。

これを一応読み下してみると、

今日の儀、毎事違失無し。天禎さいわいに快晴なり。

毎事相応す。尤も悦び思う所なり。公卿・将、並びに殿上

人、多く以つて丸緒を曳く。右大将は猶、丸緒を曳くと

云々。

前に浩垂と云々。此の条不審なり。有露に丸緒・浩垂の無露の時は然らず。内に聞き直す所也。何が是で何が非と云々。尋ぬる事也。

このように読んでみると、「丸緒」「浩垂」は何か儀礼に関わる装束に関する事ではないかと思われるが、未詳。

残念ながらこの中に年次を推定する手掛かりはない。平林盛得(注1)氏の研究により氏の検討した五点の資料中二点は建保二年五月の記文の断簡であることが立証された。他はまだ年月日不明のままであるが、この建保二年近辺の記文である可能性を一応念頭に置いてさらに探索を続けることになろうか。古筆切の場合往々にして近い箇所が残存していることが多いからである。

次に23「後宇多院 松木切」について訂正する。次のように読解するのがよいのではないか。

櫛杵秋聲発

おきのをとの秋をきかするゆふくれにちかききぬたの

こゑそひぬなり

一林紅葉送秋蝉

もみしみるもりの木すゑのいろさえて風にすくなきひ  
くらしのこゑ

雲絶遠隔鳴寒雁

しくれゆくあさけのくもはすゑとちてさむきたのものに  
かりそおちける

これで、一首目の題と歌意はほぼ一致すると思われる。二首目の一句目は「もみちちる」と読みたいところであるが、ちよつと難しいか。ただし「もみし」は歴史的仮名遣いに反しており、いかがなものか。(注2)いずれにせよ疑念は残る。

## 『名葉集 上』の内容(2)

前稿では冒頭からの天皇・皇后・上皇を伝称筆者とする部分を紹介した。今回はそれに続く親王の部から始めたい。版本の『古筆名葉集』では、親王の部には、宗尊親王を初め、守覚法親王、護良親王、尊良親王等数人の該当者が並んでいるのだが、親美翁の残した『名葉集』には伝宗尊親王の古筆切が十二枚貼付されている他には伝慈慈道親王の断簡が一枚あ

るだけである。たとえば翁が多くの所収断簡を透写している国宝手鑑『翰墨城』には、伝尊親王と伝法守親王の断簡があるにも関わらず、どちらの透写もない。透写すべき価値を感じなかったのであろうか。そんなはずはないと思う。なぜなら、三井文庫所蔵の手鑑として以前写真版の複製を刊行した『筆林』があるが、田中家には親美翁が『筆林』の所収断簡全てを透写したものが貼り込まれた一冊が現存しており、中には「寸松庵色紙」のように何度も繰り返し透写しているものさえある。『翰墨城』はおそらく益田鈍翁の手にあつた時にその全てを写していたはずである。とするなら、後年「名葉集」として貼込帳を作成する時、すでに手元に残っていないかっただけではないかと想像される。また、前稿(1)で紹介した天皇・皇后・上皇の項でも、伝聖武天皇から伝俊光院院までに止まっており、後崇光院とか後小松院など、多くの古筆手鑑に貼付されているそれ以後の天皇等の断簡は収録されていない。ご本人に確かめる術がない以上やむをえまい。

ともあれ、伝宗尊親王の項から始めよう。

宗尊親王は鎌倉時代の人で、源氏直系の跡継ぎがいなくなつた鎌倉幕府が五代将軍藤原頼嗣に次ぐ六代目の征夷大將軍

として京都から迎えた人であり、初めての皇族將軍である。しかし謀反の嫌疑をかけられたり、ごたごたに巻き込まれたりすることが多く、政治的にはほぼ無力だったと言われる。

他方、文化的には鎌倉歌壇を隆盛にし、勅撰集の編纂にも影響を与えるなど見るべき事績は多い。名筆と謳われ、古筆の筆者に擬せられることも多い。しかし実際には、宗尊親王筆と伝承される古筆には、親王の生存時代を遙かに遡る平安朝の名筆が多いのである。これは古筆切としては稀なケースである。それ故に『名葉集』においても伝宗尊親王筆の古筆切が十二点も貼られているのであろう。

### 37 宗尊親王 歌合切

いわゆる十卷本歌合の断簡である。右に述べたように、宗尊親王は実在した時代よりも古い平安朝の古筆の筆者に当てられることが多いのだが、本断簡もそうで、いわゆる「柏木切」「二条切」の二十卷本歌合よりも古い時代の書写であり、宗尊親王筆ではあり得ない。江戸時代の古筆鑑定家が書写の時代よりも書の風格を重視した結果であろうと思われるが、資料的観点からは「伝宗尊親王筆」の古筆切には注視する必要があるわけである。

さて、萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』にはこの親美翁の透写によって本文が紹介されている。だから正確には未紹介とは言えないのであるが、『平安朝歌合大成』は翻刻本文のみで、書影は載せられていないので新出断簡に準じて、ここに紹介する意味はあると思う。

歌合番号七五の「天延三年三月十日 一条中納言為光歌合」の12番に当たる三行である。寸法は二七・二×七・三cm。原本所蔵者に関する記述は見当たらない。

(図1)

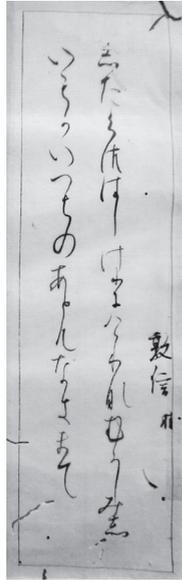


図1

(翻刻)

敦信 ■

したくさはしけりにけりなむかしもし  
いもかいへちのあとまなきまで

なお、この歌合の断簡は、『歌合大成』増補新訂版がA、B、C、Dの四枚を掲げるうちのDに当たる。旧版の『歌合大成』はABCの三点だけを田中親美翁の模写によって掲出しており、本断簡をCとしていた。増補新訂版では、「上野毅氏の示教によって」新たにCを増補して、本断簡をDに変更している。他方『古筆学大成』は、ABCの三点は影印を収録し、Dのみ「個人蔵」として釈文だけを掲げている。すなわち、本断簡の存在は知られながら、影印はどこにもないという状態であったので、ここに掲載する意義はあると考える。

因みに、『古筆学大成』以外に、Aは飯島春敬氏の所蔵で、『春敬コレクション名品図録』等に原寸大の写真があり、Bは『日本の書の美』にやはり原寸大の写真がある。Cは『古筆学大成』の写真が唯一である。

### 38 宗尊親王 如意宝集切

散逸歌集『如意宝集』の断簡である。藤原公任撰になる私撰集で、後にこれを基にして『拾遺抄』が編まれたとも考えられている。完本が存在しておらず、佚文として「如意宝集切」が唯一の残存本文を伝えているのであるから、佚文の集

成が極めて重要であることは言うまでもない。久曾神昇氏による佚文集成の試みが精力的になされ、その成果たる同氏による「佚文集成」の33として翻字されている。「集成」に久曾神昇氏蔵とされているので、原本が現存していることは明らかであるが、前項同様に書影は未だ紹介されていないようなので、参考までに透写の図版を掲げておく。寸法は、二四・二×九・二cmである。五行分のみ断簡である。

(図2)

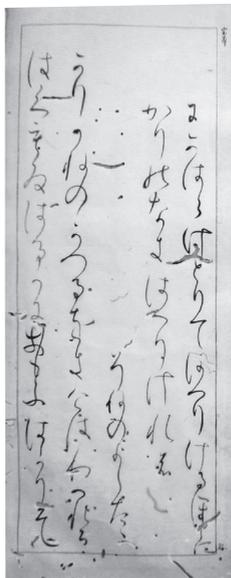


図2

(翻刻)

にかはらけとりてはへりけるほどに

かりのなきはへりければ

そねのよした、

かりかねのかへるをきけはわかれち

はくもぬはるかにおもふはかりそ

### 39 宗尊親王 桂様万葉集切

これは伝源順筆「梅尾切」とされる平安朝書写の『万葉集』（桂本万葉集とも呼ばれる）を、鎌倉時代に模写したものと見られているものである。『万葉集』の巻八1147～1148番に相当する箇所。本断簡のツレと見做される「桂様万葉集切」は残存数が非常に少ないので、一葉といえども貴重である。本断簡は、縦二一・七×横一三・八cm。下絵も透写されている。なお、「桂本万葉集」の断簡は「梅尾切」と称されるが、宮内庁に保管される「桂本万葉集」は巻四の大半を残す卷子本で、藍、淡藍、淡紫、淡茶などの色変わりの料紙に、金銀泥で鳥、草花、樹木、波などの繊細な下絵が描かれている。断簡の「梅尾切」にも同様の下絵が見られる。「桂様万葉集切」にもよく似た下絵が見られるのだが、「桂本」「梅尾切」の下絵と見比べると、幾分繊細さに乏しく、図柄も多少異なるように観察される。本断簡の下絵も樹木に波の図柄であるが、鳥や樹木の葉の描き方に多少の違いが感じられるように思う。

(図3)

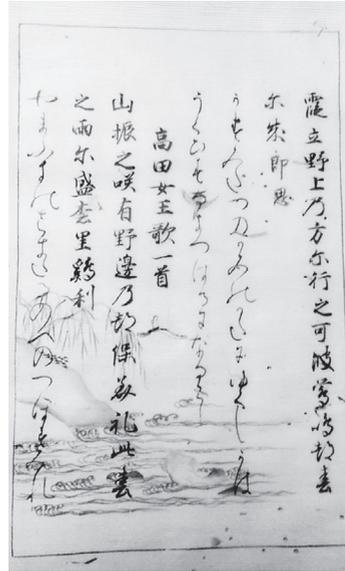


図3

(翻刻)

霞立野上乃方尔行之可波鷺鳴都春  
尔成即思

かすみたつのかみのかたにゆくしかは  
うくひすなきつはるになるらし

高田女王歌一首

山振之咲有野辺乃都保美礼此春  
之雨尔盛松里鷄利

やまふきのさきたるのへのつほすみれ

40 宗尊親王 四辻切

鍋島本催馬楽譜(国宝指定)の断簡である。鍋島家蔵本から切り出された断簡で、ごく限られた数しか存在しない。本断簡は国宝手鑑『藻塩草』に貼付されたものの透写である。原色原寸の複製もあり、図版も多数存在するので、ここでは省略に従う。

41 宗尊親王・神楽歌切

平安朝書写の神楽歌の断簡である。本断簡は『翰墨城』に貼付されているものの透写である。よって割愛する。なお、『翰墨城』所収の断簡以外には、飯島春敬氏編の『古筆名葉集』に収録されている一葉が知られるのみの極めて希少の古筆切である。

42 宗尊親王・如意宝集切

『如意宝集』については既に上述した。本断簡は『翰墨城』所収の断簡であるから、これも省略する。

43 宗尊親王 熊野切

『白氏文集』巻六「帰田三首」の断簡。本断簡は『古筆学

大成』に既に個人蔵として写真が掲載されているので、割愛する。

#### 44 下絵

いずれの断簡の下絵であるか定かでない。本文は写されていないので省略する。

#### 45 宗尊親王 桂様万葉集切

前述した39と同様の梅尾切の鎌倉時代の模写と考えられるものである。本断簡は『藻塩草』所収の断簡であるから、省略に従う。

#### 46 宗尊親王 熊野切

再び「熊野切」である。本断簡は『白氏文集』卷六「朝回遊城南」の冒頭部分で、『翰墨城』所収断簡の写しであるから、これも省略に従う。

#### 47 宗尊親王 桂様万葉集切

また、「桂様万葉集切」である。『万葉集』卷八1439—1440の断簡で、前述の『藻塩草』所収断簡にほど近い箇所。本断簡

は昭和六十二年十月刊『思文閣墨蹟資料目録』一八三号に掲載され、さらに翌年昭和六十三年十一月刊『思文閣古書資料目録』一一八号「創業五十周年記念善本一〇〇選」にカラー写真が掲載されている。誰が購入したのか、今は行方が分からない。古書店の古い目録を見る困難さに鑑みて、参考までに掲載する。目録の写真と比べても完全に一致し、下絵まで正確に写し取られているが、ここには昭和六十三年の目録所載写真を掲げる。透写の寸法は、二〇・四×一三・一cm。

(図4)

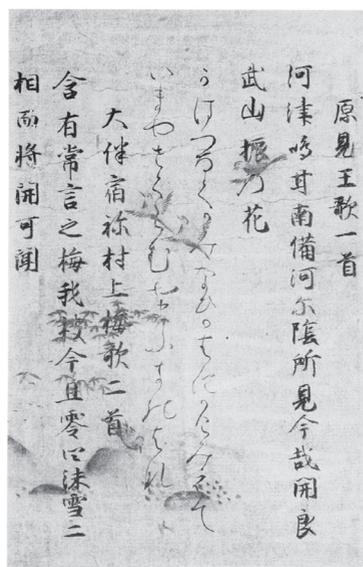


図4

(翻刻)

原見王歌一首

河津鳴甘南備河爾陰所見今哉開良

武山振乃花

かはつなくかみなひかにはかけみえて

いまやさくらむやまふきのはな

大伴宿祢村上梅歌二首

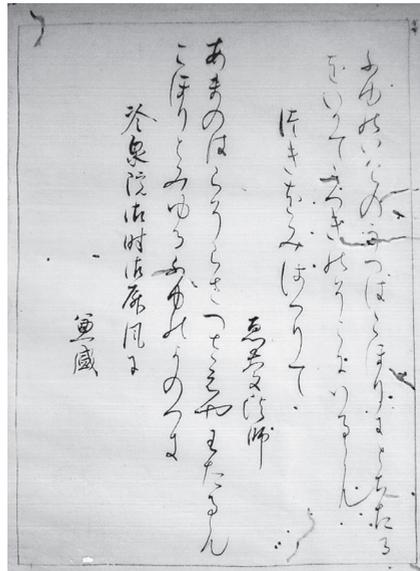
含有常言之梅我枝今且零四沫雪二

相而将開可聞

48 宗尊親王 如意宝集切 これまた「如意宝集切」である。

本文じたいは久曾神昇氏の「集成」に某家蔵として翻字されており、内容は分かっていたが影印は公表されていないと思われる。親美翁の透写には「谷」とあり、これが所蔵者を表しているらしいのだが、前号に記した通り誰を指すのかは不明とせざるを得ない。二四・五×一七・九cm。

(図5)



(翻刻)

ふゆのいけのうへはこほりにとちたる  
をいかてかつきのそこにいるらん

つきをみはへりて

惠慶法師

あまのはらそらさへさえやわたるらん  
こほりとみゆるふゆのよのつき

冷泉院御時御屏風に

兼盛

図5

## 49 宗尊親王 熊野切

これもまた「熊野切」である。内容は『白氏文集』巻六「自吟拙什因有所懷」の一首の全部。二三・二×一八・三cm。「熊野切」は界線と罫線のある料紙に書写されている。界高二〇・八cm、罫幅二・二cmである。なお、天地左右の紙幅は断ち落とされているらしく、ほとんど料紙の余白に余裕がない。料紙の大きさを比較するときは注意が必要であろう。余白にこれも「谷」と記されている。(図6)

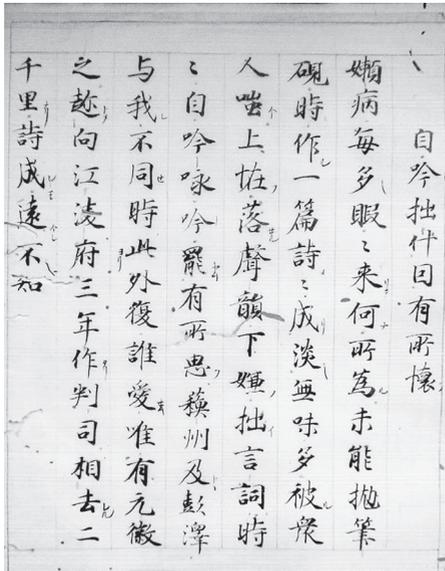


図6

## (翻刻)

自吟拙什因有所懷

嬾病毎多暇々来何所為未能抛筆

硯時作一篇詩々成淡無味多被衆

人曠上怪落聲韻下嫌拙言詞時

々自吟詠吟罷有所思蘇州及彭澤

与我不同時此外復誰愛唯元微

之趣向江凌府三年作判司相去二

千里詩成遠不知

## 50 慈道親王 往來物切

前述の通り、宗尊親王以外の唯一の親王の断簡。書状の一部と思われるが、実際に使われた書状というより、往來物の一部なのではないかと思う。ただし、では何という往來物かということ、実は確認できていない。文字の大きさが揃っていること、あまり速筆でないということからの推測であるが、実際の書状ではないと断言できるほどの確証はない。三三・六×九・五cm。出所は「翰林帖」と記されている。

## (図7)

(翻刻)

雖久紙挟通事□□

寸筆免經道事甚勝位

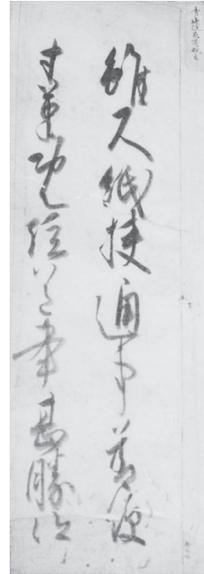


図7

## 51 法性寺忠通 近衛殿切

『昭和古筆名葉集』の「法性寺関白忠通つとむ公」の項に「近衛殿切」を筆頭に掲出し、「巻物唐カミ胡粉地行書 一行九字十字」とある。一見すると漢詩の一部のごとく見えるが、一致する文言を探してみたところ、『溪風拾葉集』が引用する貞慶の「無常句」の一節が合致した。これは『藻塩草』所収断簡の写しであるが、他に「近衛殿切」と見られる断簡は、出光美術館所蔵の古筆手鑑『墨宝』所収の一枚と、東京国立博物館所蔵の古筆手鑑『毫戦』所収の一枚のみで、この二枚の内容は共に、『白氏文集』巻三「上陽人」の二節である。そ

うすると、本断簡は他の二葉のツレではないということになる。「近衛殿切」とは呼べないのかもしれない。

## 52 九条兼実 経切(3)

『法華経』巻七「妙音菩薩品第二十四」(057b12-15)の断簡。『昭和古筆名葉集』には二種の「経切」が挙げられているが、早く文政十一年版の『古筆名葉集』に載せられている経切には「金界草花下画墨書」とあり、『昭和古筆名葉集』では「類切多シ」という文言が加えられている。さらに『増補新撰古筆名葉集』からはもう一種の「経切」が加わり、「墨罪一行十七字朱星アリ」との説明がある。しかるに、実際に残存している経切のうちには「兼実」筆との極めを持つものは非常に少ない。確認しているところでは、徳川黎明会所蔵の『集古帖』と、今治市河野記念館所蔵の『藁叢』に収載されている二葉と、本断簡の三葉しかない。「類切多シ」という割には該当する断簡を見つけられないのはどうしたところだろうか。しかも、『集古帖』の断簡は金銀砂子の雲霞に、天地の余白には金銀箔を散らし、銀界罪というなかなか豪華な料紙が用いられているのに対し、『藁叢』の断簡は縹地の料紙で朱点がある。そして本断簡には「金銀霞砂子」の説明

が記入されている。本断簡は『集古帖』の断簡とツレの可能性がないとは言いつれないが、銀界罫への言及がないという点からは別種と考えるべきかと思う。そうすると、三種三様の別種となり、仮に、『集古帖』の経切を下絵アリとして(1)、『叢叢』の経切を朱星アリと見て(2)、本断簡は以上とは別の(3)と分類しておくことにする。二四・二×五・八cm、界高二〇・三、罫幅二・〇cmである。出所は「岸」とある。

(図8)

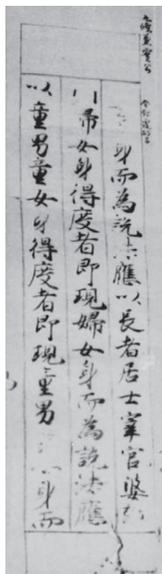


図8

(翻刻)

■身而為説法應以長者居士宰官婆羅

門婦女身得度者即現婦女身而為説法

以童男童女身得度者即現童男童女身而

53 九条兼実 縁起巻物切

『古筆名葉集』の兼実の項に「縁起巻物切 杉原地仮名交

リ」とあるものに該当すると思われる。ツレと見られる断簡が数点あり、料紙の縦が28〜29cm程度で、一行の字数が概ね14〜20字と、ほぼ一致する上に筆跡も類似する。かつ、多くの断簡の内容に「持経者を供養する」という文言が見られることからツレと判断して差し支えないと考える。本断簡は、二八・二×四・四cmである。下端が半字ほど切断されているらしい。知られる限りの本文からは、果たして「縁起」なのか、何らかの仏教説話なのか判断としない。余白に「益田」とあり、益田鈍翁の所蔵だったか。

(図9)

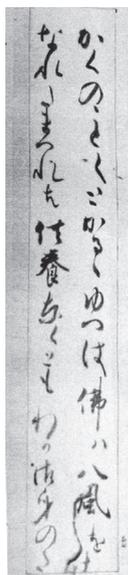


図9

(翻刻)

かくのこくとかる、ゆへは仏ハ八風をば

なれたまへれば供養なくともわか御身のた

54 後京極良経・雲州消息切

『昭和古筆名葉集』の良経の項に「巻物切 雲州消息紙五色金銀下画アリ」とある。『古筆切目安』には「明衡往来ノ切紫地菊ニリントウノ下絵」とある。これに該当する断簡は、『翰墨城』の65と67に収載されている二葉と、『高松帖』に収められている一葉の三点である。本断簡は、この内の『翰墨城』65の透写である。

## 55 後京極良経・内侍切

本断簡は、『翰墨城』に貼付されている「内侍切和漢朗詠集」の透写である。

## 56 後京極良経・和漢朗詠集切(17)

後京極良経筆とされる『和漢朗詠集』の古筆切はかなり多くの種類があり、固有名で呼ばれる名物切には、「内侍切」・「常知切」・「嵯峨切」・「大字朗詠切」などがある。このうち一番新しい『昭和古筆名葉集』に立項されているのは「内侍切」と「常知切」の二種で、末尾に○印を付して新収録の名物切として「嵯峨切 朗詠歌二行書昭和廿年了任切」が加えられた。その他、「巻物切」が三種立項されており、その一つが前掲の「雲州消息」、その二が「集不詳 詩チラシ書等

アリ下画砂子等ハ跡入ナリ」というもの、その三が「朗詠大中小アリ常知切ニ似テ異ナリ」という。即ち『和漢朗詠集』の断簡には大小さまざまなものがあるというわけである。

『古筆学大成』は「内侍切」・「常知切」・「嵯峨切」の他に(一)～(五)の図版を掲げている。私が調べた範囲でもさらに十種以上の「後京極良経筆和漢朗詠集切」なるものが存在する。因みに『古筆学大成』の(一)が、所謂「大字切」に該当する。

本断簡は、『和漢朗詠集』巻下(700—701)である。いかにも後京極良経風の筆致であるが、他にツレと見られるものもなく、仮に「和漢朗詠集切(17)」とした。二六・四×一二・一cm、界高二三・二、野三・〇cmである。余白に「野金泥」「益田」とある。

(図10)

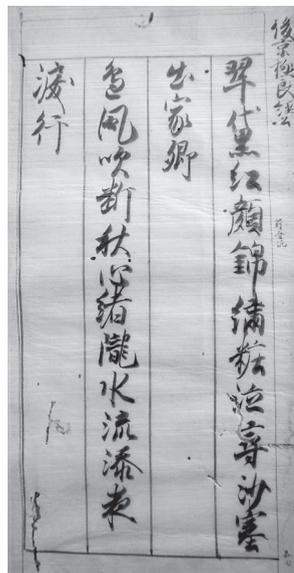


図10

(翻刻)

翠黛紅顔錦繡粧泣尋沙塞

出家郷

邊風吹折杖心緒隴水流添夜

淚行

57 後京極良経・和漢朗詠集切 (18)

次も『和漢朗詠集』の断簡であり、卷上(72―73)。同じくツレの断簡が見当らないので(18)とした。二九・四×六・一cm、界二三・八cmで野線はない。これも余白に「益田」とある。

(図11)



図11

(翻刻)

あらたまのとしちかへるあしたより

またる、ものはうくひすのこゑ

あさみとりはるたつそらにうくひすの

はつこゑまたぬ人はあらしな

58 後京極良経・雲州消息切

本断簡は、54で述べた『翰墨城』67に収載の「雲州消息切」の透写である。

59 後京極良経・新古今集切 (三)

本断簡もまた、『翰墨城』68に収載される『新古今集』の断簡の透写である。

60 後京極良経・古今集切(一)

伝良経筆の「古今集切」は、『古筆学大成』では(一)(二)(三)の三種類に分けられている。その他にも数種類の断簡があり、現在時点で七種に区分している。本断簡は後京極良経筆「古今集切(一)」の新出断簡の透写である。巻十七(882—884)で、二二・六×一五・〇cm。所蔵者については何も記されていない。

(図12)

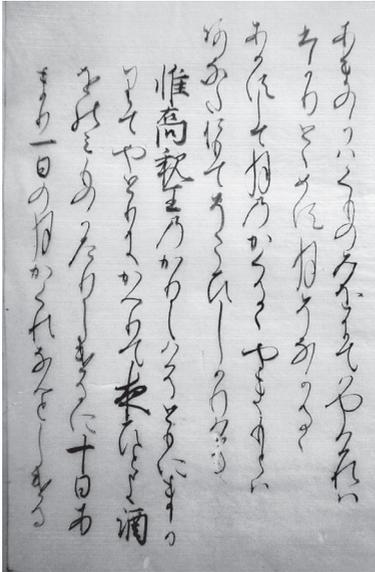


図12

(翻刻)

あまのかはくものみをにてはやければ  
ひかりと、めす月そなかる、  
あかすして月のかくる、やまもとは  
あなたおもてそこひしかりける  
惟喬親王のかりしけるとともにまか  
りてやとりにかへりて夜ひとよ酒  
をのみものかたりしけるに十日あ  
まり一日の月かくれなんとしける

61 後京極良経・拾遺集切

『拾遺集』巻十八(1177—1178)の断簡である。『古筆名葉集』の類に後京極良経の『拾遺集』は立項されていない。また、私の知る限り、他に良経筆とされる『拾遺集』の切もない。ゆえに現存唯一の断簡である。筆跡は所謂後京極流ではあるが、他の伝承筆者の古筆切の中に異伝のツレがあるかもしれない。今のところそれにも思い当たらない。本文は定家本とは相違があり、誤写もあるようである。一五・八×一三・八cm。出所の記載はない。

(図13)

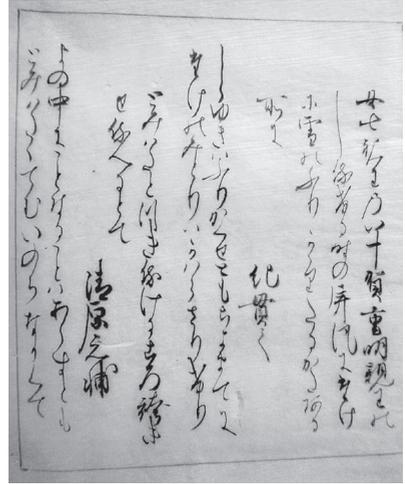


図13

(翻刻)

女七親王の八十賀重明親王の

し侍ける時の屏風にたけ

に雪のふりかゝりたるかたある

所に

紀貫之

しらすゆきはふりかくせともちよまてに

たけのみとりはかはらさりけり

とみはたとつき侍けるころ袴き

せ侍へるとて

清原元輔

よの中にことなることはあらずとも

とみはたゝてむいのちなかくて

62 後京極良経・色紙(10)

後京極良経とされる色紙も多く、『古筆学大成』は(一)ゝ

(九)に分類しているが、勿論それ以外にもあり、『翰墨城』

所収の色紙なども代表的なものであろう。本断簡はその『翰

墨城』所収の色紙である。

63 九条教家 仏書切

本断簡は、内容未詳の仏書の断簡であり、ツレも今のところ

存在しないようである。三一・八×九・二cm。余白に「益

田」と記されている。

(図14)

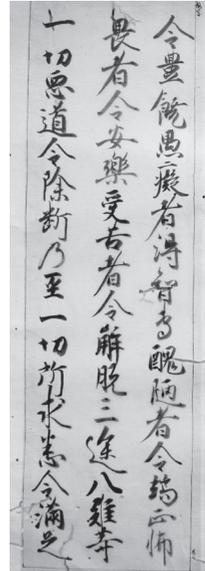


図14

(翻刻)

令豊饒愚痴者得智恵醜陋者令端正怖

畏者令安樂受苦者令解脱三途八難等

一切悪道令除断乃至一切所求悉令満足

64 鷹司基忠 古今集切(2)

鷹司基忠の「古今集」断簡といえは、『古筆名葉集』類に掲げられる「小倉切」が有名であり、かつ多数が現存している。それ以外に名葉集に載らない「古今集切」が若干あり、本断簡はその一つ。巻十七(909-913)で、ツレはない。二四・一×一五・八cm。余白に「谷」の書入れあり。

(図15)

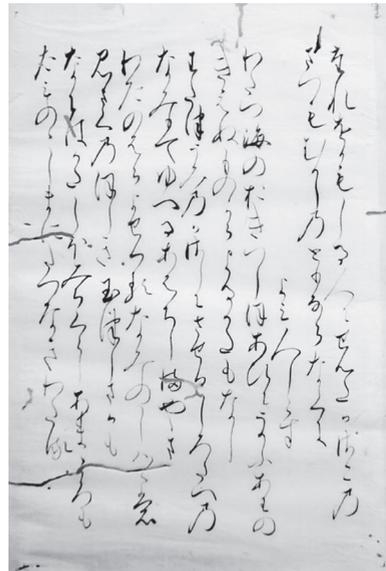


図15

(翻刻)

たれをかもしる人にせんたかさこの

まつもむかしのともならなくに

よみ人しらす

わたつ海のおきつしほあひにうかふあわの

きえぬものからよるかたもなし

わたつうみのかさしにさせるしろたへの

なみもてゆへるあはちしまやま

わたのはらよせくるなみのしはくも

見まくのほしき玉つしまかも  
なにはかたしほみちくらしあまころも  
たみの、しまにたつなきわたる

65 三条公忠 西京切

『千載集』巻十七（1094—1097）で、一六・五×一五・五cm。「谷」と記されている。三条公忠は西本願寺所蔵『慕婦絵詞』の詞書の筆者であると知られている。それと比較して「西京切」は真筆とは言えないようである。しかし、公忠は数々の古筆切の筆者に擬されており、中でも最も有名で残存数も多いのが「西京切」である。本断簡はその新出の一葉である。

(図16)

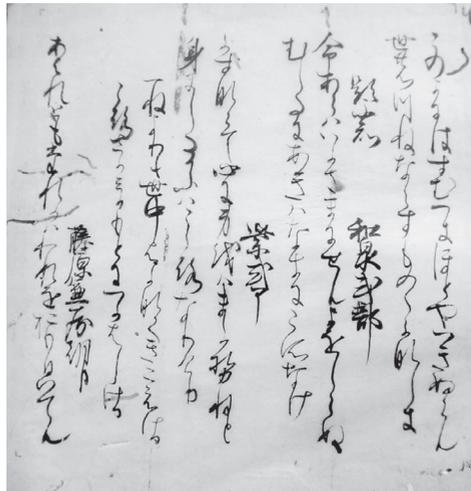


図16

(翻刻)

このよにはすむへきほとやつきぬらん  
世のつねならすもの、かなしき

題不知 和泉式部

命あらはいかさまにせんよをしらぬ  
むしたにあきはなきにこそなけ

紫式部

かすならて心に身をはまかせねと

身にしたかふはこゝろなりけり

つねよりも世中はかなくきこえける

ころさかみかもとにつかはしける

藤原兼房朝臣

あはれともたれかはわれをおもひいてん

66 飛鳥井雅経・今城切

「今城切」は『古今集』の断簡で、藤原教長の真筆と判明している。既によく知られた事柄であるからここでは触れない。本断簡は『古筆学大成』に個人蔵として図版が掲出されている。なお、本透写には所蔵者として「岸」という書込みがある。ここから「飛鳥井雅経」が十五枚続く。とりわけ「今城切」の透写が十三枚もあるので、新出の断簡が六葉も含まれており、非常に貴重である。

67 飛鳥井雅経・今城切

この断簡は五島美術館に所蔵されるものの透写である。ただし五島美術館所蔵の断簡は離れた箇所二枚を貼りつないでいる。その右側の一葉であり、貼り合わされる前の段階で透写したらしい。

68 飛鳥井雅経・今城切

見開きの二面の透写。『古今集』は卷十八(942-947)である。寸法は二三・七×一五・九cm。界高が二・二cmで、横幅の枠は一二・八cmである。所蔵者についての書入れはない。(図17)

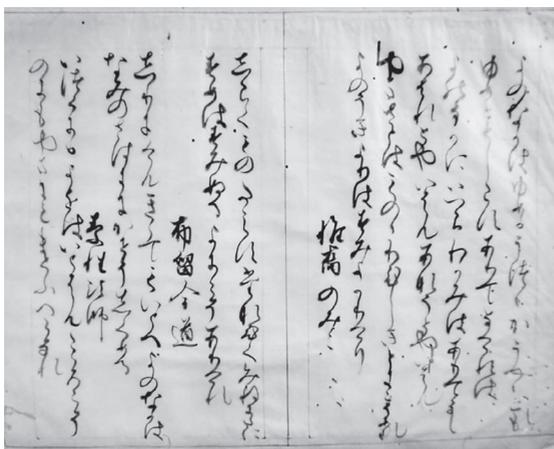


図17

(翻刻)

よのなかはゆめかうつ、かうつ、とも  
ゆめともしらすありてなければ

よのなかにいつらわかみはありてなし  
あはれとやいはんあなうとやいはん  
やまさとはもの、わひしきときこそあれ  
よのうきよりはすみよかりけり

惟喬のみこ

しらくものたえすたなひくみねにたに  
すめはすみぬるよにこそありけれ

布留今道

しりにけんき、てもいとへよのなかは  
なみのさはきにかせそしくめる

素性法師

いつくにかよをはいとはんこ、ろこそ  
のにもやまにもまとふへらなれ

69 飛鳥井雅経・今城切

この断簡は、『翰墨城』所収断簡の透写である。

70 飛鳥井雅経・今城切

これは、田中塊堂の『つちくれ』収載断簡の透写である。

71 飛鳥井雅経・今城切

これは新出の断簡。『古今集』卷十七(870—871)で、二  
六・五×一五・一cm、界二一・三、横枠二二・一cmである。  
出所については「谷」と記載されている。

(図18)

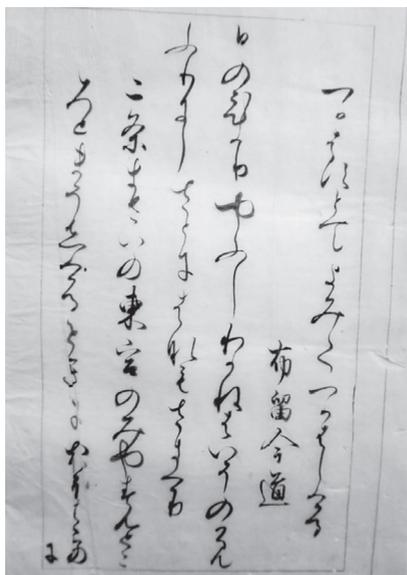


図18

(翻刻)

つかはすとてよみてつかはしける

布留今道

ひのひかりやふしわかねはいそのかみ  
ふりにしさとにはなもさきけり

二条きさいの東宮のみやすんとこ  
ろとまうしけるときにおほはらの

に

72 飛鳥井雅経・今城切

これも新出の断簡。『古今集』巻十五(789—790)である。

寸法は二四・八×一五・七cm、界二一・三、枠幅二二・八cm。

所蔵者については、「岡田蔵」と記されている。

(図19)

よみてつかはしける

兵衛

藤原高常朝臣むすめ

あひしれりけるひとのやうやく  
かれかたになりけるあひたにやけ

つらきひとよりまつこえしとて

(翻刻)

よみてつかはしける

兵衛藤原高常朝臣むすめ

してのやまふもとよりのみかへりきぬ

つらきひとよりまつこえしとて

あひしれりけるひとのやうやく

かれかたになりけるあひたにやけ

73 飛鳥井雅経・今城切

これも新出の断簡。『古今集』巻八(387—388)である。寸

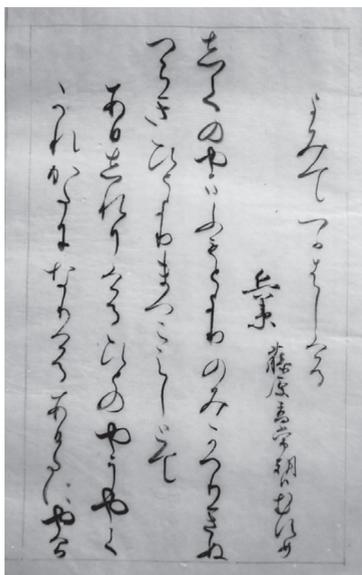


図19

法は二六・二×一五・八cm、界二一・三、枠幅一二・八cmである。出所については何も記されていない。

(図20)

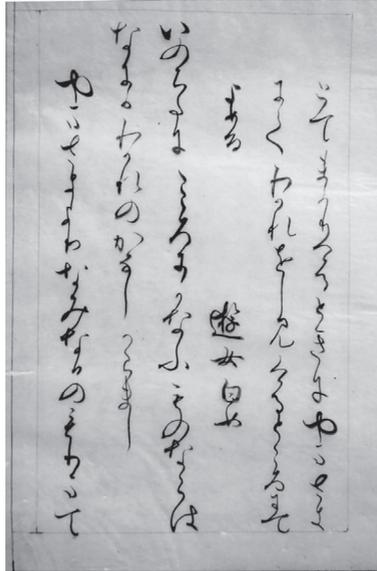


図20

(翻刻)

とてまかりけるときにやまさき  
にてわかれをしみけるところにて  
よめる  
遊女白女  
いのちたにこゝろにかなふものならば  
なにかわかれのかなしからまし

やまさきよりみななかのもりまで

74 飛鳥井雅経・今城切

これは『古筆学大成』に桑山美術館の所蔵として写真が掲載されており、複製手鑑の『なつやま』にも原寸の影印がある。

75 飛鳥井雅経・今城切

これも『古筆学大成』に写真が掲載されており、原本は五島美術館の所蔵である。

76 飛鳥井雅経・長谷切

これは、「長谷切」と称される『和漢朗詠集』の断簡であり、久曾神昇氏の『和漢朗詠集切集成』に写真が収められている。

77 飛鳥井雅経・今城切

再び新出の「今城切」断簡である。『古今集』巻十八(977)で、二五・三×一四・四cm、界二一・八cm。横の枠は片側の線が見えないので実測できない。所蔵者は「益田」と

ある。

(図21)

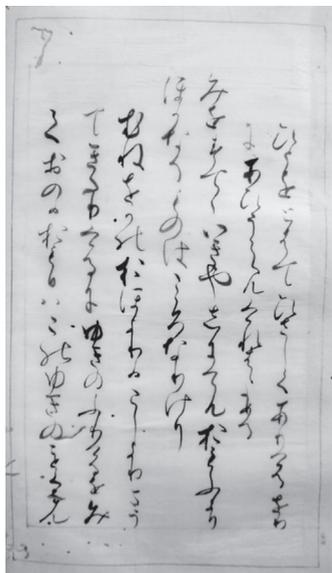


図21

(翻刻)

ひとをととはてひさしくありけるをり

にあひうらみければよめる

みをして、いきやしにけんおもふより

ほかなるものはこゝろなりけり

むねをかのおほよりかこしよりまう

てきたりけるにゆきのふりけるをみ

ておのかおもひはこのゆきのことくなん

78 飛鳥井雅経・今城切

この断簡はすでに『古筆学大成』に「個人蔵手鑑」として影印がある。

79 飛鳥井雅経・和漢朗詠集切

飛鳥井雅経筆と伝承される『和漢朗詠集』の古筆切には前掲の「長谷切」ともう一種「金銀切箔切」と呼ばれるものがある。そのいずれにも属さない唯一の断簡がこれで、『古筆学大成』に「住吉家讀集手鑑」として図版が掲載されている。

なお、「飛鳥井雅経」の項はここで終る。

80 飛鳥井雅有・八幡切

ここからは「飛鳥井雅有」になる。雅有といえは「八幡切」と言えるくらい圧倒的な枚数の断簡が残っている。しかも雅有の真筆であることが分っている。「八幡切」といえは、伝小野道風筆「麗花集」が有名であるが、石清水八幡に所蔵されていたゆえに付けられた名物切名であると解されており、この雅有の「八幡切」の名もかつて松花堂昭乗が所蔵したことに因むとされている。なお、雅有の「八幡切」には、『後拾遺集』の断簡と『千載集』の断簡とがあり、いずれも、藍

の内曇の料紙と紫の内曇の料紙とが混用されている。

本断簡は『千載集』の方で、巻十(624—625)の八行である。料紙の雲は藍色に着色されている。二二・八×一六・二cm。余白に「谷」の書入れがある。

(図22)

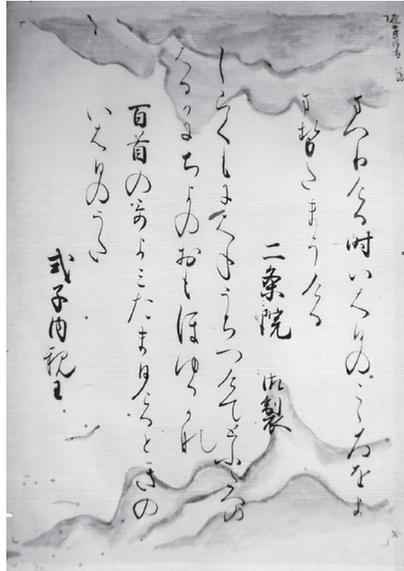


図22

(翻刻)

まつりける時はひのこ、ろをよ  
ませたまうける

二条院 御製

しらくもにはねうちつけてとふたつの  
はるかにちよのおもほゆるかな

百首の哥よみたまひけるときの

いはひのうた

式子内親王

81 飛鳥井雅有 八幡切

前項に続いて、これも雅有の「八幡切」であるが、内容は『後拾遺集』の方である。巻六(392—393)の七行の断簡で、寸法は二二・八×一六・二cm。藍の内曇に着色されている。

これも余白に「谷」と記されている。「八幡切」は基本的に一面八行の書写が行われており、一行少ない。こうした場合、余分とみなされた次の歌の詞書とか作者名などが断ち落とされたり、削り取られている場合がほとんどであり、本断簡は末尾に一行分の余白があることからみて、おそらく後者なのであろうと考えられる。

(図23)

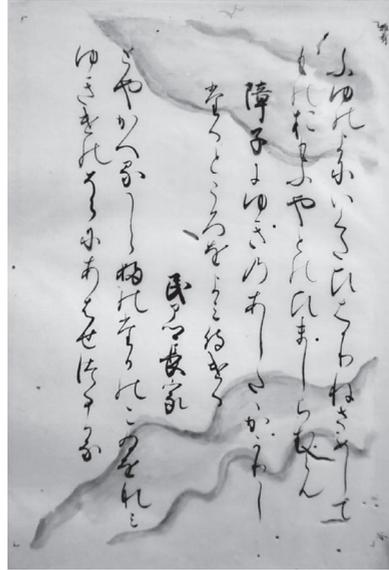


図23

(翻刻)

ふゆのよにいくたひはかりねさめして  
ものおもふやとのひましらむらん

障子にゆきのあした、かかりし

たるところをよみ侍ける

民部卿長家

とやかへるしらふのたかのこゑをなみ  
ゆきけのそらにあはせつるかな

82 花山院師賢 松尾切

師賢の古筆切というと、『古筆名葉集』類に掲げられてきたのは、「巻物切 源氏哥一行書」と「同(巻物切) 続後拾遺 一行書」の二点であった。『増補新撰古筆名葉集』に至ると前者には「松尾切」の名が付けられ、「源氏哥ノ註」との説明が付され、後者は「集未詳」とされた。ようやく昭和六十年代に至ってそれぞれの書名が判ってきた。後者は出光美術館蔵の『見ぬ世の友』に「佐々木切」の名が付されていることで、近年ではこれを用いて「佐々木切」と呼称されるようになったが、田中登氏によって散逸歌集の『二八要抄』の断簡であることが明らかにされた。<sup>(注4)</sup> 前者は注ではなく、『源氏物語』中の和歌を抄出し、簡便な詞書を付した『源氏集』という散逸歌集の断簡であることも明らかにされた。京都国立博物館蔵の『藻塩草』に「松尾切」の名が付されている。

「佐々木切」「松尾切」のいずれも、花山院師賢真筆の懐紙や短冊と同筆とされ、花山院師賢の真筆であると認められている。本断簡は新出の「松尾切」の断簡である。『源氏物語』「須磨卷」の206—207番の歌を抄出している。二六・九×八・七cm。所蔵者名に関する注記はない。

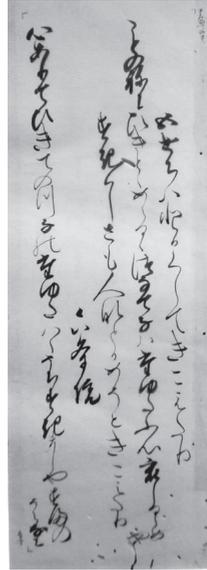


図24

(翻刻)

五せちはとかくしてきこえたり

ことのねにひきと、めらる、つなてなはたゆたふ心君し  
るらめや

すき／＼しさも人とかめそときこえたり

六条院

心ありてひきてのつなのたゆたは、うちすきましましやすま  
うらなみ

須磨に退去している光源氏を、任期を終えて上京する大宰  
大弉一行が書状で訪れた際の五節の君と光源氏の挨拶の贈答  
歌である。詞書も原文をそのまま抜書している。なお、五節

の君の歌の第二句は「ひきとめらるる」とあるべきところだが、「、」はついうっかりの衍字であろう。

83 甘露寺資経 堀川院切

これは『堀河百首』の断簡で、『古筆学大成』は複製手鑑『小鑑』の引用図版を載せている。『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究編』でこれを利用している。

84 甘露寺資経 堀川院切

これも前項と同じ『堀河百首』の断簡。『古筆学大成』は個人蔵として写真を掲載している。根津美術館の展示図録には植村和堂氏蔵とある。

85 萬里小路宣房 笠置切

萬里小路宣房の古筆切として『古筆名葉集』類に掲げられるのは「笠置切」が唯一の名物切である。『法華経』と『観普賢経』の断簡が存在している。卷八の完本が藤田美術館にあり、宣房の署名と花押があるほか、卷二、卷六、卷七などの零本に同様の宣房の署名・花押などが見え、萬里小路宣房の真筆であることが確認できる。本断簡は『法華経』卷五

「提婆達多品第十二」の一部である(34c 04—15)。二八・〇×一六・二cm、界二二・〇、野二・一cm。所蔵者名の記載はない。

(図25)

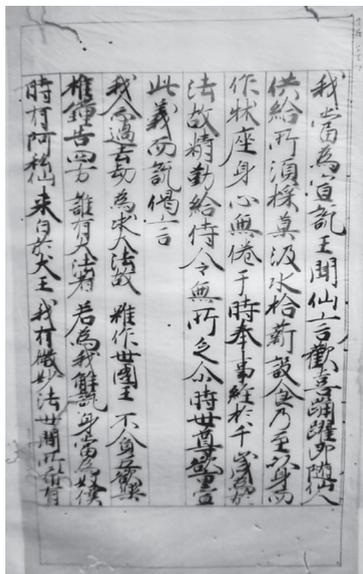


図25

(翻刻)

我當為宣說王聞仙言歡喜踊躍即隨仙人  
 供給所須採菓汲水拾薪設食乃至以身而  
 作牀座身心無倦于時奉事經於千歲為於  
 法故精勤給侍令無乏尔時世尊欲重宣

此義而說偈言

我念過去劫為求大法故雖作世国王不貪五欲樂  
 椎鐘告四方誰有大法者若為我解說身當為奴僕  
 時有阿私仙来自於大王我有微妙法世間所希有

86 萬里小路藤房 道僖切

古い時代の『古筆名葉集』類には「萬里小路藤房」は載っておらず、『増補古筆名葉集』に至ってようやく、「道僖切」と「山田切」の二種が登場してきたらしい。本断簡は『後撰集』巻二〇(1383—1384)の新出断簡である。『増補古筆名葉集』には、「道僖切 四半後撰哥二行書」とある。もとより藤房の真筆であるか否かは不明である。残存数が非常に少ないうえ、これまでに発見されているのは僅かに五葉に過ぎない。しかも、巻十九と巻二〇の断簡しか見だされておらず、本断簡も巻二〇である。田中登氏の『平成新修古筆資料集・三』の解説に言われるとおり、もともと巻十九と巻二〇との零本があつて、それを分割したのではないかという推測が当たっているであろう。寸法は、二二・五×一五・〇cm。余白に「谷」とある。

(図26)

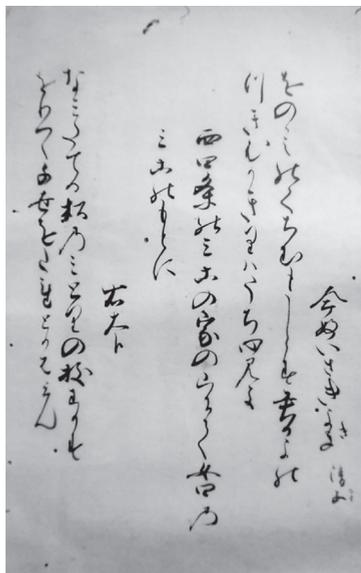


図26

(翻刻)

命ふいさきよき子 清子

をのゝえのくちむもしらす君かよの

つきむかきりはうち心みよ

西四条のみこの家の山にて女四の

みこのもとに

右大臣

なみたてる松のみとりの枝わかす

をりつゝ千世をたれとかはみん

87 萬里小路藤房 山田切

こちらは「萬里小路藤房」の「山田切」の方である。「山田切」も残存数が非常に少なく、これまで四葉が見出されているだけである。ただ、こちらは、『藻塩草』・『見ぬ世の友』・『翰墨城』という国宝四大手鑑のうちの三つに貼付されており、もう一葉は五島美術館蔵の『染紙帖』に貼付されている。その他の手鑑類に一枚も存在しない方が不思議ではある。内容は四葉とも、『因明四種相違略私記』巻下である。

ところが、本断簡は『因明入正理論』(012 a 21—23)であり、筆跡も幾分違いがある。明らかにツレではない。本断簡の肩には親美翁の筆跡で「山田切」と書かれてはいるが、やはり「山田切」とは異なる仏書の切とみなすべきなのであろう。所蔵者の注記はない。

(図27)

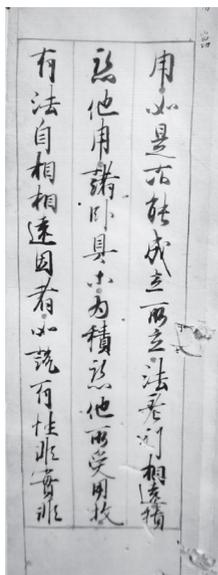


図27

(翻刻)

用必是亦能成立所立法差別相違積  
聚他用諸臥具等為積聚他所受用故  
有法自相相違因者必說有性非実非

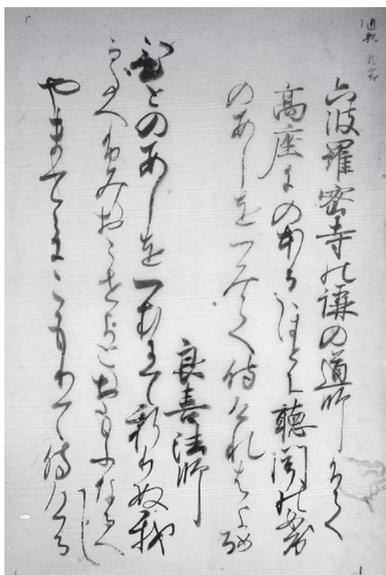
88 萬里小路藤原 道儔切

前掲の「道儔切」のツレ。『後撰集』の断簡で、『翰墨城』  
所収断簡の透写である。

89 源通親 龍山切(二)

『千載集』卷十八(1194—1195)の断簡。従来、「龍山切」には  
一首二行書の部分と三行書の部分があると考えられてきたが、  
『古筆学大成』が二行書を(一)、三行書を(二)と分けて集  
成したことで、この二種はツレではなく、別種の本から切り  
出されたものであることが明らかになった。共に升形本の断  
簡であり、筆跡もよく似ているため、非常に区別をつけにく  
かったのであるが、分けてみると、筆意に若干の違いがあり、  
料紙の大きさにも微妙な差があることが判明した。残存数が  
少ないとなかなか分別が難しい問題ではある。これは(一)  
の新出断簡である。一八・二×一・二cm。

(図28)



(翻刻)

六波羅密寺の講の導師にて  
高座にのほるほとに聴聞の女房  
のあしをつみて侍ければよめる  
良喜法師  
ひとのあしをつむにてしりぬ我  
かたへふみおせよとおもふなるへし  
やまてらにこもりて侍ける

図28

## 90 源俊房 黒谷切

古い『古筆名葉集』類に「源俊房」の項目はなく、『増補古筆名葉集』に至って、「堀川左大臣俊房公 黒谷切 四半形丹地ノ絹仏書甚稀ナリ」と出てくる。「甚稀ナリ」というとおり、『藻塩草』所収の一葉しか知られていない。内容は『善財童子絵』の画賛と考えられている。本断簡は『藻塩草』の切の透写である。

## 91 久我通具 和漢朗詠集切

『和漢朗詠集』下(340―342)である。通具を伝承筆者とする古筆切の代表的なものに、『千載集』の断簡である「坊門切」、『時代不同歌合』の断簡である「山中切」などがあり、それぞれに相当の枚数の存在が知られているが、『和漢朗詠集』の断簡はこれまで発見されていなかった。したがって、本断簡は唯一の孤立的な存在である。他方、『和漢朗詠集』の古筆切は枚挙に暇ないほどあるので、他の伝承筆者の中にツレがあるかもしれない。今のところ確認しきれていないので後考に俟つとしよう。一六・六×一四・三cm。料紙にすやり霞の紋様が見えるが、これはおそらくそうした装飾を施した反故紙を利用したためであろう。余白に「谷」と記されて

いる。

(図29)

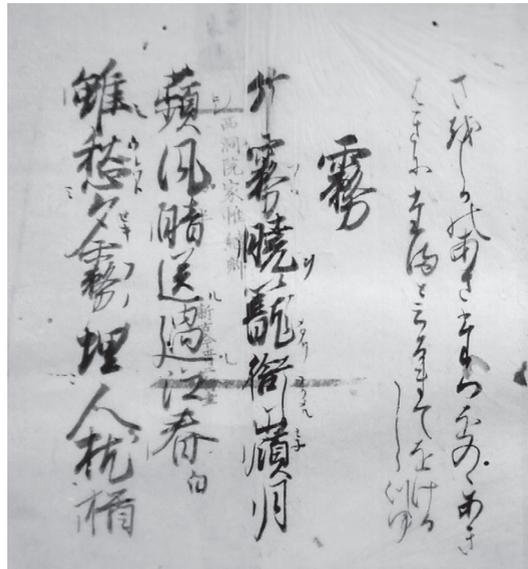


図29

(翻刻)

さをしかのあさたつをの、あきはきにたまとみるまでをける

しらつゆ

霧

竹霧曉籠銜嶺月

蕓風暖送過江春日

雖愁夕霧埋人枕猶

92 世尊寺行経 屏風詩歌切

本断簡は国宝手鑑『翰墨城』に貼付のものの透写である。

寛仁二年正月、摂政藤原頼通の大饗のために調製した屏風に書く詩歌の草稿と言われている。『小右記』の記事から筆者は藤原行成とされている。行成の四十七歳の時の真筆として極めて重要視されるが、春名好重は『古筆大辞典』の解説において「行成の真筆とは認められない」と言う。はたしていかがなものであろうか。

93 藤原行成 法輪寺切

『和漢朗詠集』の断簡。本断簡の原本は『古筆学大成』に個人蔵として図版が掲載されている。

94 世尊寺定実 粉河切

これも『翰墨城』所収断簡の透写である。国宝三大手鑑のすべてに断簡が収載されているにも関わらず、未だ五葉しか発見されていない。その五葉すべてが『高野大師行状図絵』巻三の断簡であり、異本系統とされる。

95 世尊寺伊行 古今集切(2)

世尊寺伊行を伝承筆者とする「古今集切」は極めて少ない。鶴見大学図書館所蔵の一葉を仮に(1)とすると、本断簡は別筆なので(2)とすると、この二葉しかない。今後ツレが発見される可能性はありそうだが、二七・六×八・一cm。「仮名序」の一部である。余白に「谷」とある。

(図30)

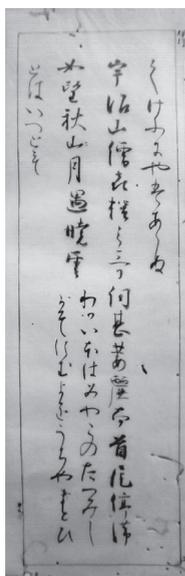


図30

(翻刻)

のけふにやはあらぬ

宇治山僧喜撰の哥詞甚美麗而首尾停滯

如望秋山月遇暁雲

わかいははみやこのたつみ  
かきあはせをいとあはれ

とはいへとも

96 世尊寺伊経 久世切

これは『古筆学大成』に個人蔵として図版が載る『万葉集抄』八行のうちの前半四行の写しである。複製手鑑『なつ山』や小松茂美『古筆』などにも八行の図版が掲載されているが、これは巻九の四行と巻十五の四行を貼り合わせたもので、貼り合わされる以前に透写したのであろう。

97 世尊寺伊経 源氏物語切

『源氏物語』宿木巻の一節。二七・三×五・二cm。世尊寺伊経を伝承筆者とする「源氏物語切」は他に存在を知らない。「源氏物語切」も世に無数と言っても過言ではないほどあるので、他の伝承筆者にツレがあるかもしれないのは、前述の「久我通具 和漢朗詠集切」の場合と同様である。ただし注意を要するのは、縦が二七cmという大型本であるのに対して、一行十一字という大きな文字で書かれていることで、通常の書物では有り得ない。散らし書きの一部か、絵巻の詞書か、

いささか不思議な形態である。余白に「翰」とある。

(図31)

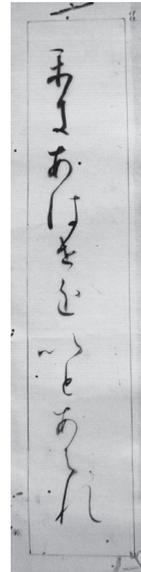


図31

(翻刻)

かきあはせをいとあはれ

98 世尊寺伊経 難波切

元暦校本『万葉集』の断簡で、これも『翰墨城』所収のもの透写である。

99 世尊寺伊経 久世切

再び『万葉集抄』の写しで、これは『藻塩草』所収断簡の透写である。

100 世尊寺伊経 久世切

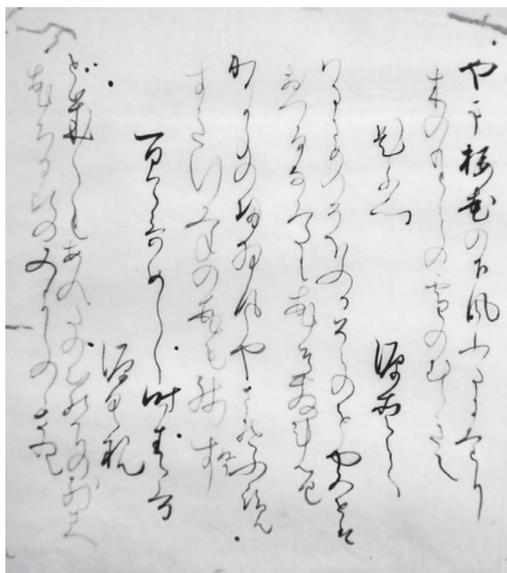
これも『万葉集抄』の「久世切」である。本断簡は「古筆

学大成』に個人蔵手鑑として掲載されている他、非常に多くの図版が紹介されている。

101 世尊寺行能 宇治切

『新古今集』巻二(118—121)の新出断簡である。行能は、後世世尊寺の三筆と呼ばれた書の名手であり、行能以後の世尊寺家の書風を世尊寺流と呼ぶとされ、実に多くの古筆切の筆者に充てられている。「宇治切」はそれらの中でも特に有名なものの一つである。現在までに三〇葉程の断簡が見出されているが、巻一から巻十までに限られており、上下二巻からなる本の上巻だけが切断されたのであろうと推察される。下巻については現存するか否かを含めて不明であるが、上巻の残り具合から考えると、下巻のみの零本としてどこかに秘蔵されている可能性を捨てきれないのではなからうか。本透写の原本所蔵者に関する記述はない。寸法は一五・九×一五・四cmである。

(図32)



(翻刻)

やま桜花の下風ふきにけり  
木のもことこの雪のむらぎえ

題不知 源重之

はるさめのそほふるそらのをやみせず  
おつるなみたに花そ散ける  
かりかねの帰羽風やさそふ覧

図32

すぎ行みねの花も残すな

百首哥めし、時春哥

源具親

ときしもあれたのむのかりの別さへ  
花ちる比のみよしの、さと

102 世尊寺行能 和漢朗詠集切(五)

『和漢朗詠集』は巻下(780—783)で、三二・四×一四・五cmである。世尊寺行能を伝承筆者とする古筆切の中で最も量の多いのが『和漢朗詠集』の断簡である。伝行能筆の『和漢朗詠集』の完本は今でも時々市場に姿を現すほどである。『古筆学大成』は「藤井切」を筆頭に、(一)から(十三)まで十四種類の「和漢朗詠集切」を掲載している。しかし、実際には十四種類に止まらず、その他にも多数の別種の断簡があり、現在までのところで、私において四十五種類まで分類しているが、まださらに別種が存在することは分かっている。本断簡は右の内の「和漢朗詠集切(五)」に相当すると考えられ、当断簡を含めて六葉を確認している。余白に「谷」と記されている。

(図33)

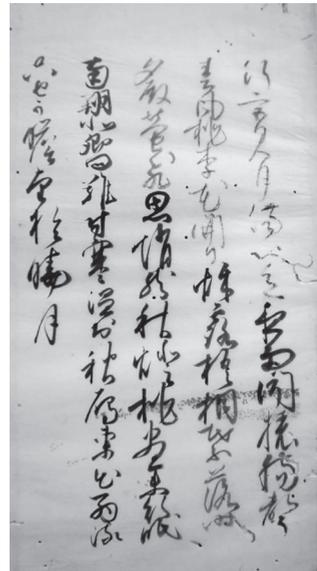


図33

(翻刻)

行宮見月傷心色夜雨聞猿腸聲

春風桃李花開日秋露梧桐葉落時

夕殿蛩飛思悄然秋燈挑尽未能眠

南翔北嚮難付寒温於秋鴻東出西流

只寄瞻望於曉月

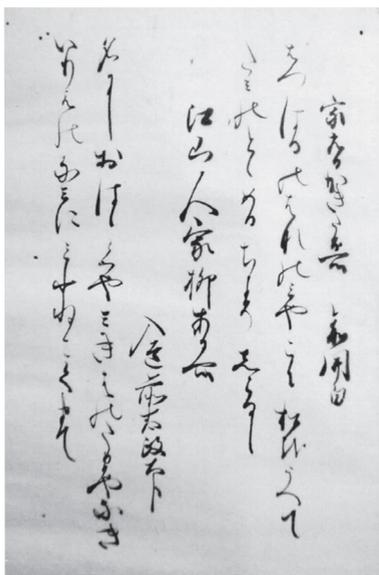
なお、一行目の「猿」の下に「断腸」の「断」の文字が脱落している。

103 世尊寺経朝 新勅撰集切

『新勅撰集』巻七(466—467)の断簡。見出しには「世尊寺

「経朝」とあるのだが、本断簡は『古筆学大成』が「世尊寺行尹」の「新勅撰集切」としているもののツレである。実は伝世尊寺云々の「新勅撰集切」の極めは相当複雑に混乱しているようである。『古筆学大成』が「世尊寺経朝」と認定しているのは、『翰墨城』所収断簡のツレであるが、世に「世尊寺経朝」とされている断簡のうちの相当数が、実は「世尊寺行尹」とされる断簡のツレであり、逆に「行尹」とされている断簡のうちの相当数が「経朝」のツレである。また、「世尊寺行豊」とされるものが「経朝」のツレであったり、「世尊寺行房」とされるものが「行尹」のツレであったり、「世尊寺定成」とされる断簡が「行尹」のツレ、「津守国冬」とされる断簡が「行尹」のツレなどと、混乱を極めている。世尊寺流の筆跡に、当然のことであるが、類似したものが多いためであろうと考えられる。本断簡は、二二・二×一四・五cm。余白に「谷」とある。

(図34)



(翻刻)

家元日かきたる所 前関白

はつはるのはなのみやこに松をうへて  
たみのと、めるちよそしらる、

江山人家柳ある所

入道前太政大臣

名にしおは、くやみきはのたまやなき

いりえのなみにみふねこくまで

なお、二首目の第二句「くや」は「しくや」の脱字か。

図34

## 104 世尊寺定成 新古今集切(一)

『新古今集』卷十三(1153—1154)である。世尊寺定成を伝承筆者とする「新古今集切」には三種を確認できる。本断簡はその(一)に該当する。(一)は現時点で三種のうち残存数の最も多いもので、『古筆切影印解説Ⅲ新古今集編』、『平成新修古筆資料集・二』等に掲載されているもののツレである。一六・二×一四・〇cm。霞の下絵のようなものが見えるが、これまた反故を使用したと思われる。余白にこれも「谷」とある。(図35)

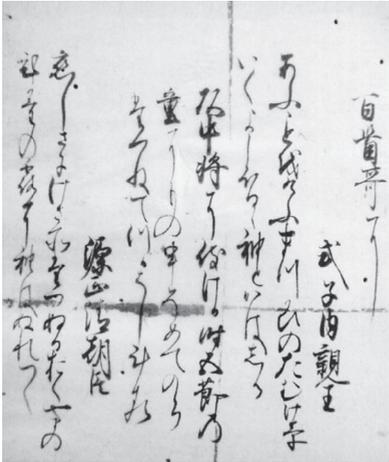


図35

(翻刻)

百首哥に

式子内親王

あふことをけふまつかえのたむけ草

いくよしほる、袖とかはしる

頭中将に侍ける時五節の

童にも申そめてのち

たつねてつかはしける

源正清朝臣

恋しさにけさそたつぬるおくやまの

ひかけの露に袖はぬれつ、

## 105 世尊寺行尹 続拾遺集切

『続拾遺集』卷八(594—596)の新出断簡。『古筆学大成』には徳川黎明会所蔵手鑑『葦叢』に貼付される二葉が掲げられているが、本断簡を含めて五葉が知られる。料紙の寸法は、二二・一×一四・〇cmである。原本所蔵者についての記述はない。

(図36)

(翻刻)

題しらす 前大納言為家

みしことのみなかはりゆく老のみに

こゝろなきは秋のよの月

西行法師

なに事もかはりのみゆく世中に

おなしかけにてすめる月かな

高弁上人

秋のよもつねなるへしとおもひせは

のとかにみまし山のはの月

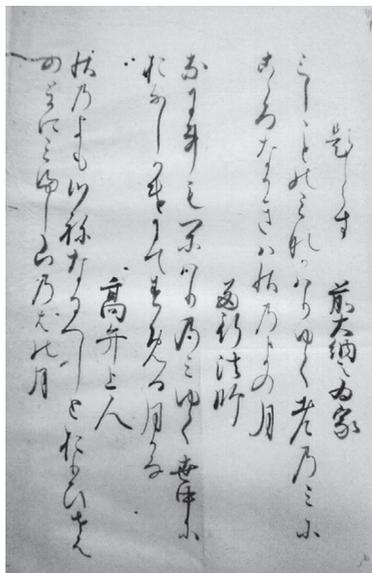


図36

106 世尊寺行俊 続古今集切

見出しには、「世尊寺行俊」としてあるが、『古筆学大成』

が「寂恵筆続古今集切」としているもののツレである。巻十七(152—155)の断簡で、ツレとして巻十六の零巻及び、巻十六から巻二〇までの集後半の断簡ばかり十二葉と一巻が知られている。寂恵真筆とされる「石見切」などとも同筆と認められ、寂恵の真筆とみなされる。二二・〇×一五・三cm。余白にはこれも「谷」とある。

(図37)

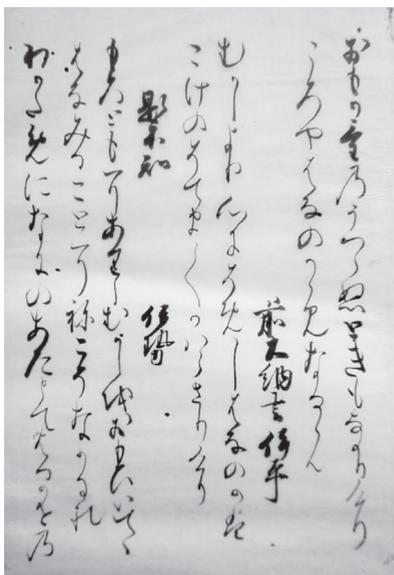


図37

(翻刻)

おもかけのうつらぬときもなかりけり

こゝろやはなか、みなるらん

前大納言伊平

むかしより心にそめしはなのかは

こけのそてまてかはらざりけり

題不知 伊勢

もろとももありしむかしをおもひいて、

はなみることになこそなかるれ

わかたけになにのあたとてはるかせる

以上で「世尊寺家」を伝承筆者とする古筆切が終わる。これに続いて、「源順」の「梅尾切」の写しに始まり、「藤原定頼」、「源俊頼」等から「源実朝」、「足利尊氏」に至る人々が並ぶ。もはや予定の枚数を大幅に超えてしまったので、今回はここまで留めたい。

## 1 注

平林盛得「後鳥羽天皇宸記切と宸記逸文」(『古筆研究会創立 国書漢籍論集』汲古書院、平成三年八月に所収)

2 木下華子氏のご教示によると『延喜御集』に「もみし」の

例が一首見られる(ただし誤写の可能性もある)とのことである。

3 久曾神昇「如意宝集(研究・翻刻)」(『久曾神昇博士追悼研究資料集』風間書房、昭和四十八年五月に所収)

4 田中登「古筆切の国文学的研究」(『風間書房』平成九年九月)

なお、冒頭の前稿の訂正については、久保田淳、細貝宗弘、徳植俊之、吉野朋美、木下華子の各先生方から、誤読の指摘、解説案など懇切なご教示を賜りました。特にお名前を記して深甚の謝意を申し上げます。

(こじま・たかゆき 成城大学名誉教授)